寄稿

二八会から

平泉町で恒例の同期会

平泉中学校を昭和28年に卒業した同級生による毎年恒例の同期会「平泉中二八会」（初貝博好会長）が残暑厳しい9月5、6日の2日間、68人の参加者を迎えホテル武蔵坊で開かれました。

代表あいさつで初貝会長が「今年は1人の物故者もなく、皆さんと古都平泉で再会できたことは非常に喜ばしい」と述べました。

われわれの小学生時代は太平洋戦争のさなかで、教育、物資、食料などないないづくしを経験しました。現在は飽食の時代で、宇宙も身近になってくるなど、社会が急速に発展し、タイムスリップした70有余年の歳月は、夢のように思われてなりません。

昭和20年8月10日8時30分ごろ、平泉駅下り線ホームの巨大な変圧器に米軍機の機銃攻撃があり、駅前の民家45戸が火の海と化したのは小学2年生の時でした。戦争が終結し、祖国復興のためわれわれは我慢、我慢で暮らしてきたように思います。

日本は現在、世界一の長寿国となり、平均寿命は女性86歳、男性79歳となりました。今後の余暇の過ごし方次第でわれわれの余生も変わってきます。

長年の夢で歌手になった人、今までの生き方を句集に託した人、また退職後、一生懸命にくわを持つ人、トラクターで田を耕す人、二人三脚で通院している人。みんな元気で頑張って、来年東京で開かれる二八会（ふるさと平泉二八会主催）に参加しようと誓い合い、和気あいあいの雰囲気の中、散会しました。

千葉良胤（6区）

各地から駆けつけた二八会の皆さん

寄稿

ふるさと平泉会から

浄土思想の伝幡（でんぱ）を目指し ミュージカル「平泉」東京公演

一関市民を中心メンバーとする「みちのくミュージカル「平泉・夕焼けの向こうに」の東京公演が8月23日、東京都豊島区の豊島公会堂で華やかに開催されました。脚本・演出を元劇団四季団員の演出家梶賀千鶴子さん、音楽を上田享さんが担当。初演は3月21、22日の両日、一関市文化センターで発表されました。

東京公演は、現地事務局長の久保田武光さんをはじめ在京関中一高会、一関ふるさと会の協力を得て、一関市とゆかりのある豊島区の公会堂で実現しました。

ミュージカルの内容は①前九年の役で受けた幼い清衡とその母・由加の悲惨な運命②後三年の役に伴う異父兄弟の争い③生き残った初代清衡の浄土思想による中尊寺建立と戦争のない平和な国土の創造④二代基衡、三代秀衡を経て四代泰衡のとき、義経の兄・頼朝の攻略で藤原家滅亡。

この東京公演の目的について実行委員長の阿部興紀さん（前一関観光協会長）は「900年前に戦争のない平和なこの世の浄土を築いた『平和への希求』を多くの人に伝えたい」と述べ、事務局長・斉藤初美さん（元萩荘公民館長）は「同時に平泉文化遺産の世界遺産登録の実現を目指すメッセージの発信にあります」と語り、出演者全員（58人）は異口同音に「平泉の浄土思想を心を込めて伝えます」と述べています。

豊島公会堂は満席で、800人の来場客すべてに大きな感動を与え、盛大な拍手の中で、約2時間のミュージカルが閉幕しました。

ふるさと平泉会副会長　鈴木　喜佐人

ミュージカルを熱演する出演者

豊島公会堂を取り囲み開場を待つ大勢の来場客

世界遺産登録 再チャレンジ

平泉の文化遺産は、平成23年の世界遺産登録を目指して、再チャレンジがスタートしました。このコーナーでは、登録に向けた取り組み状況についてお知らせしていきます。

第12回　暫定版推薦書を世界遺産センターへ提出

9月25日、文部科学省は文化審議会文化財分科会を開催し、平泉の文化遺産暫定版推薦書の提出が承認されました。同日午後に開かれた、政府の世界遺産条約関係省庁連絡会議でも了承されたことから、フランスの日本大使館からパリのユネスコ本部世界遺産センターに提出されます。

暫定版推薦書の提出は、世界遺産登録の作業指針に基づくもので、推薦書の記載項目について、必要事項を満たしているか世界遺産センターが事前にチェックするための制度です。

なお暫定版推薦書では、推薦書作成委員会や内外専門家の意見を踏まえて「平泉 ―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び関連の考古学的遺跡群―」の名称（提出文書は英文）で提出されました。

暫定版は、主に本文が中心です。文化庁では今後、岩手県・平泉町と協力して推薦書本文の再確認を行うほか、付属資料として添付される予定の参考資料や図版・写真・映像資料など、推薦書（正式版）の作成に取り組んでいきます。

推薦書（正式版）の提出期限は、来年の1月末です。文化庁・岩手県では、これからも内外の専門家からアドバイスを得ながら、必要に応じて推薦書作成委員会を開催する予定です。

本コーナーがスタートしてちょうど1年が過ぎました。その間には、主題の検討や構成資産の見直しが慎重に行われてきました。今後は「平泉」の登録をより確実なものにするため、推薦書の内容に万全を期すこととなります。再チャレンジの取り組みは、年末にかけていよいよ大詰めを迎えようとしています。

昨年6月に中尊寺で行われた町民世界遺産誓願参拝。「平泉」の世界遺産登録は町民みんなの願い。登録推薦書作成もいよいよ大詰め

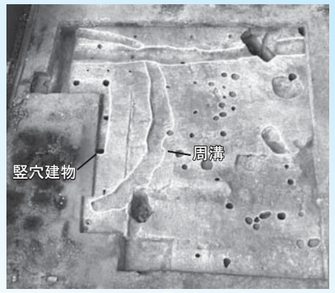
平泉を掘る

発掘最前線㊶

―無量光院跡第21次調査―

無量光院跡は三代秀衡が建立した寺院です。境内は東京ドーム1.6個分ほどの大きさですが、県道と東北本線で3分割されたため、その広さが分かりにくくなっています。5月に線路の南側を調査し、周溝を伴う竪穴建物1棟、溝3条、柱穴30個が見つかりました。

竪穴建物は、西側が調査区外のため全体の大きさは分かりませんが、南北3.35㍍、東西1.42㍍の大きさです。後世の削平を受けたため、残りが悪く深さは5～10㌢ほどでした。壁際から柱穴が見つかっています。



調査区全景（南から）

この竪穴の外側を幅31～86㌢、深さ6～12㌢の溝が円形状に巡っていました。溝に区画された範囲は南北で8.14㍍、東西方向は調査区外のため、不明ですが、確認した範囲では約4㍍ありました。竪穴建物から12世紀代の「かわらけ」が、溝から「かわらけ」と中国産白磁が出土しています。出土遺物から、この竪穴建物と周溝は一連のもので、時期は12世紀と思われます。

さて、この竪穴建物は一体何なのでしょうか？　今回の調査区から北西約60㍍の地点で、大きさや形が似た竪穴建物が見つかっています（7・9次調査）。ただし、周溝は一回り小さく方形状に巡っていたようです。この時見つかった竪穴建物は、祭祀（さいし）的な要素が強いものと考えられています。今回見つかった建物も祭祀的な性格を持ち、無量光院にかかわる建物の可能性が考えられます。

平泉文化遺産センター　島原弘征